

QASGニュース 52号

1. 第15回通常総会開催
2. 第15回通常総会・特別講演
3. 平成17年度定例研究会第1,2グループ・活動計画
4. 新役員紹介
5. 編集後記



総会で挨拶する班目会長



特別講演の東北大学名誉教授 北村正晴氏

第15回 通常総会開催される

第15回通常総会が平成17年5月31日（火）日本工業倶楽部にて開催され、盛況裡に終了した。当日は40名出席（他に委任状提出37名）のもと、平野副会長の司会で議事が進められた。

通常総会議事

1. 班目会長開会挨拶

本研究会の会長をしております東京大学の班目でございます。

本日はお忙しいところ、多数お集まり頂きまして有り難うございます。

原子力規制行政に品質保証活動が組み込まれて1年半が経過しました。これが非常にうまくいっているとは言えません。私の耳にも色々な問題点が聞こえてきます。具体例を挙げれば、品質活動の目標は各階層で定めなければいけないということを字句通りとって、部レベルだけではなくて課レベルまで決めなくてはいけないというコメントが検査官から出されたこともあったようです。この件は、目標は組織が適切な階層で定めればよいことが確認され、JEAG 4121に盛り込まれました。しかし一事が万事という感じで、まさに現場は大混乱だったのだろうと推察します。品質保証活動を規制行政に組み入れた当事者である原子力安全・保安院のほうですら、「そもそもこれは規制行政になじまないのではないか」とかちょっと自信を失っているほどでもあります。

ですが私は、もうちょっと長い目でみるべきだと思います。また、よい方向に向かっていると確信しています。品質保証活動とは何かについての理解は、やっていくうちに育っていくものです。ただ紙上で勉強しただけでは無理なのです。品質保証活動にはPDCAサイクルを回すことが組み込まれています。したがって、それをしっかりやればよいのです。現場は大変でしょうが、その解決に向けての努力は尊いものです。その努力が実り、やがてこれが原子力だけでなく日本の規制行政のあらゆる分野に広がっていく事を望んでおります。

自信を失った保安院やJNESの人に申し上げたい。「品質保証活動が規制行政になじまない」などとは言わないで、むしろ「規制行政のあり方を品質保証活動に合わせなければいけない」と考えていただきたい。そもそも何のための規制なのかを考えるなら、当然そうあるべきなのです。そのためには、ここにお集まりの皆様「そもそも品質保証活動とはなんぞや」ということをしっかり考えて頂き、広める努力をして頂きたいと思っております。

もう一点、申し上げます。原子力規制行政で品質保証活動の義務づけが事業者に限られているところがちょっと気になっております。原子力安全は事業者だけでなく関連会社を含めた全体で守らなければいけないものです。その連携が問題として噴出してしまったのが、昨年8月の美浜の事故だと思っております。まだ、JEACなどの民間規格では「関連企業も含めた品質保

証活動はどうあるべきか」について明記されていません。しかしこれは美浜の事故の報告書に「今後是非とも解決しなければいけない課題である」と明記された問題です。どうしたらいいかは規制側が考えるのではなく、産業界の方で提案して頂きたい。そうでなければ実効性がないものとなります。実効性のあるものが規制行政の中に取り入れられるようしなければいけないと思っております。

最初に申しましたように、品質保証活動が規制行政に取り入れられて1年半です。これが本当に根付くのは5年10年掛かります。皆様には一層ご努力頂いて、少しでも早く根付くようにしていただきたいと思えます。

簡単ではございますが、開会の挨拶とさせていただきます。

2. 議長選任

会則に従い、班目会長が議長に選任され、以下のように議事が行われた。

3. 議案審議

1) 平成16年度活動報告並びに収支決算案承認の件

永田幹事、池田幹事よりそれぞれ活動報告ならびに収支決算報告がなされた。また、鎌田監事より会計監査報告が行われ、両議案とも提案通り承認された。

2) 平成17年度活動計画並びに収支予算案承認の件

永田幹事、池田幹事よりそれぞれ活動計画ならびに収支予算案の説明が行われ、両議案とも承認された。

3) 顧問選任承認の件

矢作幹事より平成17年度及び18年度の顧問選任について提案がなされ、審議の結果、提案通り4氏の顧問選任が承認された。

4) 平成17年度役員選出の件

三角副会長より新役員の提案が行われ、審議の結果、提案通り10氏が選任された。



(社)日本原子力産業会議副会長 宅間正夫氏挨拶

本研究会の顧問に選任された宅間正夫氏より、議案審議後ご挨拶を頂いた。

ただいまご紹介頂きました宅間でございます。

伝統ある業界の品質関係のトップクラスの皆様方の集まりで、顧問という高い立場にご指名頂きまして有り難うございます。私、力不足ではございますけれども、頑張っ

て参りたいと思いますので宜しくお願い致します。この機会にお話しておきたいのは、日本原子力産業会議（以下「原産」と言う）が今大きく改組改革しようとしております。一昨年くらいから、民間産業団体が何とかしないといけないということで「新しい原子力の再生に向かって民間産業団体がまず変わっていき、それに応じて、企業の皆様方の意識も変え、仕事のやり方も変え、まさに社会から支持される原子力、社会に開かれた原子力界になっていこう、どこまで出来るか分かりませんがそれをリードしていこう」ということ



今年の4月13日、日本原子力技術協会という技術の面での団体ができました。自己責任に基づく自主保安というものをしっかり産業界全体の中でやっていけるように組織が出来ました。それに呼応して、来年くらいになるでしょうが、「原産」のほうが改組改革致しまして、(仮)日本原子力産業協会が出来ます。「原産」という伝統ある名前は残りますし、JAIFという名前がブランドになっていますので海外名は変わらないですむのかなと思います。その中で、政策提言、規制対応、情報発信、今まで物言わぬ産業界と言われておりましたけれども、これからは自らものを言うことによって或いは自らの行動で社会の信頼を得ていく、その上に立って我々は本当に健全な原子力の発展を通じて社会に貢献しようという壮大な理想を掲げております。それから会員連携の強化、国際協力・国際展開、単なる国際協力ではなく、プラント輸出も含めた国際展開を産業界全体として取り組んでいくのです。これは新聞にも報道されましたが、長期計画の中にも関心を持って取り上げられております。官民挙げてアジア諸国の資源制約、環境制約、これらを乗り越えるために平和利用の原子力をアジア諸国に広めていき、これによって国際的・社会的緊張緩和を少しでも実現しようという思いです。

もうひとつは、産業基盤の強化です。発電だけではなくて、量子、放射線等を含め新しい技術開発に関して取り組んで参ります。その中の一つに品質保証活動を位置づけております。単なる品質保証をやる人達の教育というのではなく、産業基盤の強化のための大きな活動として、日本原子力技術協会ではなく、「原産」自らがやっていくことになっています。そのような中で、皆様には是非頑張っ

よく考えてみますと、企業は自由主義経済社会の中で、その自由主義経済を安定化させ、成

長させる一つの大きな存在であると思いますし、その社会的存在である以上は社会的責任が生まれてくるのです。社会的責任を全うするためには、現場も経営者も含め、一人一人が内なる声に耳を傾けて倫理観をしっかりと身に付け、しっかりした倫理観に基づいて品質保証活動を行うことが必要だと思っております。品質保証活動の目的というのは、それぞれの社会的責任を果たし、品質を作り込みながら社会の信頼を得ていくということだと思っております。

教育についても同じです。人を育てるということは、機械・サービスに対して品質を作り込んでいくのと同じように、人格、人間性を作り込んでいくのです。その人がベースとなって品質保証活動を行っていくわけですから、教育と品質保証活動とは一体となっているものと私は思っております。

以上のように頑張りたい、お手伝いをしていきたいと思っておりますので、宜しくお願い致します。ご静聴頂き有り難うございました。

以上をもって、通常総会を閉会した。

平成16年度 定例研究会・活動報告

三角副会長の進行により、平成16年度の活動結果について各グループリーダーから報告された。

1) 第1グループ（渡邊邦道リーダー）

研究テーマ：品質保証システムの研究

活動概要：「原子力発電所における安全のための品質保証規程（J E A C 4111-2003）」を適用する際に、調達先に要求する「品質マネジメントシステム指針」の検討、作成を行なった。

2) 第2グループ（清川和宏リーダー）

研究テーマ：エラーマネジメントに関する調査研究

活動概要：組織事故や不祥事を未然防止するための実務的対策の提案を目標にして活動を行なっているが、取り組みの初年度として、事例分析や関連分野の文献調査等を実施した。また、「エラーマネジメント基礎講座（第1回）」を11月に開催し、実務者のためのヒューマンエラー分析手法について説明、事例演習を実施した。

「原子力安全学の再構築と科学技術者の役割」

講師：東北大学 未来科学技術共同研究センター客員教授 北村 正晴 氏

東北大学名誉教授北村正晴氏から「原子力安全学の再構築と科学技術者の役割」と題して、特別講演を頂いた。



－ はじめに －

社会と適切な関係を持ってない企業は、社会・マーケットから、レッドカードを突きつけられているのが現状である。適切な関係を保つためには、適切な発信を行うことが必要となる。このコミュニケーションを行うためには、社会の心を理解しないと適切なやりとりは不可能であろう。社会との関係を見直す活動、それはどうあるべきかというお話をさせていただきたい。

－ プロローグ： 技術と社会の関係をどうみるべきか －

原子力業界と一般社会の間で認識のギャップが非常に拡大している。社会の側は、原子力側の平時の発信不足やトラブル時の通告の遅さに見られるような情報発信の不手際から不安を増幅させ、不信感が拡大している。一方の原子力側は、原子力の必要性の高まり意識をちゃんと正当に評価してくれない社会への不満意識がある。そこにギャップがいよいよ拡大する要因がある。

このギャップが増大している現状に対して、社会との関係を適切化するイニシアティブは中身を一番わかっている原子力専門家サイドが取らなければいけないであろう。適切な関係を保つためには安全確保等は当然であり、さらに社会の心を理解した上での適切な発信を行うことが必要となる。

－ 反復型対話フォーラムの実施： 原子力専門家と一般社会との関係を良くするために －

市民、科学技術専門家・原子力専門家、ファシリテータ（司会進行調整役）が一堂に会して科学技術について継続的に話し合う場として「反復型対話フォーラム」を立ち上げ、実施している。

動機は、JCO事故を契機として学会などの場で様々な人の考えを聞き、原子力専門家と一般社会との関係をもう少し良いものにしたい、現状放置はできないという認識を得たことにある。

目的は、科学技術と社会の共生実現の要件を探すためであり、原子力の技術について一生懸命説明して、一般社会にリスクベースの考え方を理解してもらうことで状況を良くしようと考

えた。

その結果、技術の話に留まらず、実際の生活体験に根ざした発言、メディアの報道姿勢に対する不満、例えば、「風評被害が非常に気になる」とか、「日常的に強い不安感を持っているわけではないが、手放していいとも思っていないので胸の奥深くにずっと押し殺しているような不安が当然ある」とか、「人間関係が複雑で、地域内で自由な発言が出来ない」など、様々な方面から原子力に否定的な見解が構成される様相が見えてきた。また、原子力専門家がいくら安全だと言ってもそれは過去の実績であり、対する危険・不安・リスクは未来へのネガティブな可能性の話である。「今まで原子力はちゃんと安全にやって来たからこれからも大丈夫」という原子力専門家の説明は論理的に考えても飛躍がある。こういった指摘は、原子力専門家側にとって今後の社会との向かい合い方を考える重要な示唆と受け取るべきであろう。このような原子力専門家側の認識変化と並行して、一般市民の認識も、徐々に変化してきた。リスク概念が少しずつ定着してきたため、知りたいという理解志向の意見から、前向きに取り組む解決志向の意見、プロアクティブな態度が形成されてきている。

リスク概念を技術に繋がったリスクだけと捉えて考えるのは妥当ではなく、原子力に対する否定的な概念というのは技術以外の広い範囲の要因にまで広がっているということに気付かされた。科学技術側が社会側の心を深いレベルで認識すること、これまでのリスクコミュニケーションの制約を超えた新しい認識共有の形が必要である。技術専門家を主体とした様々な対話スキームの実践に着手することが今、必要ではないか。

－ 社会と共存すべき技術：安全性向上策追求の反作用・落とし穴 －

社会との関係で一生懸命語るといふこととは別に、気を配らなければならない問題がある。品質保証とリスク論の観点から、品質保証あるいは安全性向上技術の主要な期待効用はリスク発生確率の低減活動であるから、考えられるハザードというのはそのまま残っている。事故等が起きた時、結果として想定外イベントへの説明責任が生じる。なぜ想定外としたのかという正当化の理由を納得できる形で一緒に発言する必要がある。安全性追求の諸方策には必ず説明する側の意図と逆の懸念を持った反作用というべき反応が起こり得る。安全性を追求した結果、過信状態、安全過信が起こり得る。品質保証体制の強化も、書類だけを見る安全活動やマニュアル至上主義になると、その安全性追求策が最後の砦であるという意識を弱体化させるという落とし穴にもなり得る。安全性追求策にも、対社会関係の評価も念頭に置いた認識が必要である。安全性維持活動、品質保証活動に際しても社会的な目配りとそれを踏まえた積極的方策が望まれる。

－ 科学技術者の新しい役割：社会との連携で共同の問題解決のフレームワーク作りを －

原子力に代表されるように、現代の課題は、自分が創り出した科学技術文明が結果として生み出したリスクである以上、従来のアプローチ、つまり科学技術専門家に一任するようなやり方では、本質的に解決は無理と思われる。だからこそ、社会との連携を決して狭い意味のリスクコミュニケーションではなく、共同の問題解決のフレームワークを考えなければならないという意味で捉える必要がある。

－ エピローグ：技術専門家も積極的に社会へのアクションの一步を踏み出そう －

我々の社会が原子力に限らずいろいろな技術と共存しなければいけないという認識は相当広い範囲に根付いており、健全な市民は十分認識している。しかし、原子力関係者は実態以上に「一般社会の方が原子力を厳しく見ている」、つまり、「社会から嫌われている」と必要以上に思っている。

技術専門家は、対社会関係の再構築にもっと積極的に参加してほしい。従来、会社の中だけで暮らしてきた会社的人間から社会に目配りできる社会的人間になっていただきたい。ピーター・ドラッカーの「The best way to predict the future is to create it.」という言葉は、非常に良い表現ではなかろうか。適性と立場を踏まえた技術専門家の、対社会へのアクションの一步が踏み出されることを期待している。

－ 質疑応答 －

Q1：正直な懸念として、社会の心を掴むのはフォーラムではどうにもならないような気がする。短絡的に考えると、社会の心というのはマスコミが代弁しているのではないか。

フォーラムという場では開催地の社会の心は掴めるとしても、一般に私たちが社会全体の心を掴む手段として考えるときにどんなものが考えられるか。

A1：① 今のフォーラムだけではどうにもならないというのはその通り。しかし、同じ形でやらなくてもいいから社会への発信だけは是非強化していただきたいと思う。

② マスコミにはあまり多くを期待できないが、このフォーラムのような活動をするに参加された地域の方でオピニオンリーダー的な立場の方々が非常にご自身の確信を強めて、地域社会への発信を始めている。そういう変化があることはマスコミにも話してもよいのではないか。

③ インターネットはミニコミなので大きな流れになり得るかどうかという問題もあるけれども、マスコミが必ずしも信用できないという現状で、一つの独自性のある情報チャンネルとして考えても良いのではないか。

Q2：対話フォーラムの話の中で、一般社会の認識が専門家によるネガティブ情報の公開によって、信頼も向上し、リスク概念の理解が進んだという話だったと思うが、「信頼の重要性とリスク認知の多様性」について、専門家としての信頼を勝ち得つつあるということなのか。

また、リスク認知の多様性についてはどうか。

A2： 「信頼の重要性」については、コミュニケーションの世界では Trust Building ということが強調されているが、対話する際、相手がある程度信頼していなかったら対話自体が極めて無意味なものになるゆえ、信頼は対話成立の大前提と理解して頂きたい。対話フォーラムの出発点段階では不信の構造があったが、ネガティブ情報も積極的に提示し、オンデマンドで提供し、話題から逃げない、ということを中心に心掛けたので早いうちに信頼を勝ち得た。

リスク認知については技術面のリスクだけではなく、広く捉えることにより「ネガテ

ィブな感情の総体」として多様なものがあることが分かる。これらが否定的感情の構成要素になっている。参加者が持っている様々な不安や不満を原子力側の人間がまず受け止めないとコミュニケーションにならない。背負っている問題の重さを分かることが大事なのである。

懇談会

特別講演終了後、矢作新副会長の司会のもと、班目会長の乾杯の音頭により懇談会が開催された。その中での挨拶の一部を紹介致します。

<< 班目会長の懇親会挨拶 >>

本日は北村先生に特別講演を頂きまして有り難うございました。私も北村先生に就いて六ヶ所に一度伺ったことがあります。リスクコミュニケーション、すなわち社会との対話というのは、会社の中で品質保証活動をやるよりずっと難しいということを実感して帰ってきました。

対話を成功させられるかどうかは、技術者が自分をどこまでさらけ出せるかに掛かっていると思います。これは、自分自身や、自身がやっていることや技術に対する自信があるかどうかにも帰着すると思います。それが出来ないのであれば、所詮対話は成立しません。対話を成立させることは、マネジメントシステムをきちんとすることと同様、あるいはそれ以上に大切なのです。



<< 北村先生の懇親会挨拶 >>

冒頭、北村教授からは概略以下のような趣旨のスピーチがあった。

「我々がコミュニケーションを行う際には、はじめから問題認識が共有されている相手と話す際は一言ですむ。ごく簡単な発言だけでも多くの内容を伝えることが出来る。しかし社会との対話ではそういう状況は期待できない。互いの問題認識は、技術的なことはもちろん、原子力の意義や社会的役割、将来の社会への影響などにいたるまで色々な面で食い違いが多々存在している。だからこそ、何度でも繰り返し話す対話が必要になってくる。これからは技術者もこのような対話の重要性を意識することが望まれる」

その後、司会者からの「メーカーさんの方から、どうやって社会と会話をしたらいいかよく分からないので何かヒントが欲しいというコメントを頂いています。」という要請に応じて次の説明がなされた。

「実は私は人（他人）のことを言うのは非常に苦手なので、自分のできることしか語らないつもりなのですが、少なくとも大学の先生は仕事の一部として語らなくてはならない。班目先生は役所の審議会にいくつも引っ張り出されてお忙しい方なのに、六ヶ所にお連れしてしまった



のですが、そういう方でなくても色々な方が出来る範囲で話していけばいいのです。『メーカーさんや電力さんは信頼が何より大事』と申し上げましたが、地域の集まりの中であまりに非常識な技術批判が出たら『それはちょっと違うんですよ。』と言う話をちょっとするだけでいいのです。

『一番の基本は社会に発信することでそれが大事だ』と繰り返し言っているのですが、そのフェーズを通り越したらもう発信は要らなくなるはずなのです。『あなた方がやっているならわかったよ』と言ってもらえるようにならなければおかしいのです。

名医と患者の関係の最後の形は、『過誤があっても、この医者にかかって死ぬだったら本望だ。信じているから任せた。』というのが一番いい関係だと思うのです。今、医療過誤の問題もあって緊張関係にあるのですけれども、最近の医者は医療過誤といわれかねないのでなかなか手術に踏み切れないと言います。昔のように患者を救うためには自分が失敗することへの恐れを顧みず、思い切って全力で立ち向かおうという医者がいなくなっています。なぜなら失敗したら訴えられるからです。その上、勝てないのです。複数の医者から聞いていますが『治るヤツしか手術しない』って、これはいったい何なんでしょう。

原子力社会に限らずどんな技術でもそうならないように、今は一所懸命に語って、そして最後には『任せた』といわれるようにならなくてははいけません。勿論、いきなり分かってもらえるわけではないので段階を踏まねばならないですが、技術者同士でも情報交換をして、いい専門家コミュニティが成立すればいいと思います。

最後にもう一つ、技術屋は技術屋同士、率直に語り合い、たたき合うべきです。それを通じていいものを作っていくたいし、最後は、言葉はなくても『信じた』と言うところまで行きたいと願っています。有り難うございました。」

<< 小松原先生の懇親会挨拶 >>

今日、授業で性格検査の話をしたのですが、研究職は神経質で内気でなければつとまらない。一方、教育職は積極的、社交的で外向的でなければつとまらない。ということは研究教育職である大学の先生は、二重人格でストレスをため込みやすい性格なのではないかという話をしたら、学生に結構受けました。なぜこのようなことを思い出したかという、私はヒューマンエラー、ヒューマンファクターが専門ですが、エラーマネジメント研究会のことをリーダーの清川さんから伺った時に、この研究会はエラーをうまく発生させ、誘導する研究会かと初めは思ったのです。安全破壊設計のように脆弱な部分を作っておくとそこでうまく破裂するように、人間を息抜きさせるようなエラーを起こさせなければダメなんじゃないか、この研究会はそういうことなのかと思ったのですが、そうではなくて、エラー防止をどうマネジメントするかという話でした。多分、清川さんとお話をしたときには、ストレスがだいぶたまっていたのだと思います(笑)。

とはいえ、もちろん、エラーを予測した上で、どう予防策を講じていくかという考え方はもちろん重要です。ヒューマンエラー対策という、起きてしまったことを分析してフィードバック



クするのではなくて、「そもそもこのような人・職場ではこのようなエラー（うっかり、ぼんやり）が起きてもおかしくないよな」というのを予測した上で、うまい対策を考えたり、回避するための組織設計ができるのではないかと考えています。

例えば、病院のヒューマンエラーというのは再現性が極めて高いのです。似たような年齢の、似たような病気の患者が、似たような病室にいて、似たような服を着て、似たような顔つきをしながら、似たような薬をもらっているわけですから、取り違えが起こる可能性は非常に高いわけです。でも、そのことが分かれば、対策の道筋も見えてきます。余談ですが、リスクさえ低ければ、うっかり、ぼんやり、ヒヤリハットがあっても、“人間はミスをするもんだ”というのを再認識の上ではいいんじゃないかとさえ言う人もいます。エラー誘導ということで、そのような考え方も、面白いと思います。

最近、目安箱の研究という本を見つけました。江戸時代の目安箱という、内部告発に近い制度があるのですが、下手なことを投書すると打ち首になってしまう、つまり、うまく殿様の心にフィットする投書をするとういのですけど、そうでないとおそろしいことになるので、命がけで投書をしたらしいということですが、現代の産業でも参考になるようなことが書いてあったりします。例えば、規則違反をどう管理者に伝達し、対策を講じていくのかについて、従来のヒューマンエラー対策とは全く別のパラダイムで考える必要があります。日本文化とか、江戸時代にはどういうチクリ方をしていたのかなど、興味をもって読んでいます。

今年もエラーマネジメント研究会で勉強していきますので宜しくお願い致します。

平成17年度 定例研究会・活動計画

第1グループ(リーダー:渡邊邦道会員)

研究テーマ : 品質システムの研究

研究の進め方: 現状の各社のQMS遂行の実態を見ると、何時の間にか「シロアリに土台を食い荒らされた状態」になっているケースがあり、「如何に形骸化せず、実効的に進めるか」が各社の大きな課題になっていることが判明しました。これを受けて、①内部監査、②品質目標とMR、③調達管理、④QA教育、⑤形骸化しない対応、の5グループで、ISO9004、TR0005、6等をベースに、この課題解決に向けて研究を行う計画としました。

第2グループ(リーダー:清川和宏会員)

研究テーマ : エラーマネジメントに関する調査研究

研究の進め方: ①組織事故の事例分析を継続して実施

②組織事故モデルの改良

③組織事故防止のためのチェックリスト、教育用資料の整備

新役員紹介（平成17年度）

会長	班目 春樹	（東京大学大学院工学系研究科原子力専攻教授）
副会長（総務担当）		三角 竜二（三菱重工業株式会社）
副会長（企画担当）		矢作 強（株式会社東芝）
※幹事（企画担当）	鈴木 敏雄	（株式会社日立製作所）
幹事（企画担当）		平野 幹雄（日本核燃料開発株式会社）
※幹事（総務担当）		石川 厚史（新日本製鐵株式会社）
幹事（総務担当）		永田 英明（太平電業株式会社）
幹事（会計担当）		池田 忠弘（株式会社グローバル・ニュークリア・フュエル・ジャパン）
幹事（会計担当）		中村 誠（清水建設株式会社）
監事	渡邊 邦道	（東京電力株式会社）
※監事	今村 敬	（三菱重工業株式会社）

注：※印＝新役員



新幹事 石川 厚史



新幹事 鈴木 敏雄



新監事 今村 敬

なお、鈴木 敏雄氏、今村 敬氏は第95回幹事会で新役員として選任致しました。

また、永年にわたり総務幹事としてご尽力頂いた安藤 豊氏（東電工業株式会社）及び監事の三浦 勝博氏（三菱重工業株式会社）、鎌田 信也氏（三菱重工業株式会社）が退任されました。これまでのご苦勞に感謝申し上げます。

編集後記

スペースシャトルディスカバリーの打ち上げが延期された。2時間20分後に迫っていた打ち上げ中止の判断は早かった。原因調査はこれからとのことであるが、過去の苦い事故の経験を反映して、問題が発見され、速やかに打ち上げの最終判断者に報告され、そして安全かつ適切に延期が決定されたのであろう。この延期を決定したプロセスは、まさにQMSの生きた手本であると思う。約20年前のチャレンジャー号の爆発事故では、「安全性を最優先する技術者倫理」を教えられたが、今回は、「スケジュールより安全性を優先する企業倫理」を教えられた。この編集後記がQASGニュースに掲載される頃は、原因も分かり対策が打たれていることであろう。

「事故や失敗の経験から教訓を学び、再発防止に努める」という我々技術者の基本をしっかりと守り、そして次の世代にも伝えていきたいと思う。

(R. M)